

## 【北のブランドカ】

### 正直に作ってきたクリーンな野菜（JAとうや湖クリーン農業協議会）



北海道では、恵まれた自然条件を生かし、土づくりを基本に、化学肥料や化学合成農薬の使用を最小限に抑え、環境に配慮した「クリーン農業」を進めている。早くから取り組みを始めたJAとうや湖は、その先進地。たくさんの農産物が、「湖こだわりブランド」として、市場や消費者からの信頼が高い。

北に羊蹄山、南には有珠山や昭和新山などの活火山に囲まれた、風光明媚な洞爺湖のまわりに野菜産地が広がるJAとうや湖管内。5月中旬、クリーン農業に取りくむ壮瞥町オロフレ地熱利用野菜組合のハウスを訪れると、トマトの収穫や摘果作業の真っ最中だった。

近くの山から湧き出る温泉を引き、ハウス内に 65 度の温水を循環させている。道内産地では一番早い 2 月中旬に収穫を始め、7 月末まで出荷が続く。

「うちでは 11 月末に苗を定植し、今は 7 段めを収穫中なんだ。トマトの後作に緑肥としてギニアグラスを栽培する。そうすることで、連作障害や塩類の集積を防いでいます」

と、野菜組合の組合長、込山清右エ門さん（61・写真右下）が作業の手を休めて説明する。

自然エネルギーを活用した施設園芸の始まりは、30 年前にさかのぼる。平成 15 年度にはクリーン農業を担う「YES! Clean 生産集団」に登録。現在は、7 戸の組合員が合計 1.6 ヘクタールほどのハウスでトマトを栽培する。ほとんどの組合員には若い後継者がおり、活気がみなぎる。

壮瞥町内にあるJAの野菜集出荷施設。低温や日照不足の影響から、例年に比べてトマトの出荷量は少なめようだ。

「でも、糖度はじゅうぶんある。今年はいいい味を出しているな、と思いますよ」

業務を切り盛りするJAとうや湖指導販売課の成田知亨さんが胸を張る。

選別後は「YES! Clean」のマークが入った箱に詰められ、『温泉美人オロフレトマト』のブランド名で室蘭や札幌など道内市場に出荷されていく。ゴールデンウィークまで競合する産地がなく、地熱利用の強みを発揮してきた。

クリーン農業では、土づくりを基本に据えた、化学肥料や農薬の使用量の低減が必須条件になる。

同野菜組合では、栽培品種を『桃太郎はるか』に統一し、定植前に必ず土壌分析を行う。残存窒素量に合わせて堆肥やボカン肥など有機質肥料を施用し、10 アールあたり、化学肥料の窒素量を 25 キロにと定める基準を設定。節減対象の農薬成分の使用を 19 回以下（慣行栽培の 5 割減）と定めている。

さらに、ハウスの換気や栽植密度の見直し、後作緑肥によるセンチュウ密度の低減、抵抗性の台木や防虫テープの使用など耕種的防除の徹底に努めてきた。



「組合では『YES! clean』の登録前からギニアグラスの栽培をやっていたからね。農薬使用や総窒素量の制限はあるけれど、(慣行栽培に比べても)品質・収量ともに変わりありませんよ」と、込山組合長が自信をのぞかせた。

## 農家とJA、行政が連携して



JAとうや湖は昭和62年、豊浦町や虻田町、壮瞥町、洞爺村、大滝村の旧5町村のJAが合併して誕生した。そのころ、洞爺地区の菊地博さんら15人ほどの農家が「クリーン農産物研究会」を立ち上げ、ジャガイモやニンジン、カボチャなどの減農薬栽培に着手。洞爺湖周辺でのクリーン農業の先駆けになった。

平成14年度には、JAにクリーン農業推進課が創設され、農家とJA、行政でつくる「とうや湖クリーン農業協議会」(初代会長は菊地さん)も発足。「土づくり」や

「環境に配慮したクリーン農業」「生産資材の適正処理とリサイクル」「環境美化運動」「消費者や地域住民を巻き込んだ運動の展開」の5つを柱とする『クリーン農業推進プラン』を策定した。地域ぐるみで環境保全型農業を進める基盤ができたのである。

8作物、8集団から始まった「YES! clean」の登録組織は、現在では18作物、17集団に増え、延べ291戸の農業者が455ヘクタールの圃場でクリーン農業に取り組む。これに、エコファーマー認定者やプライベートブランド表示による特定販売を加えた「こだわり農産物」の取扱高は約9億9千万円(21年度実績)。右肩上がりに取扱高は伸びており、道内トップクラスのクリーン農業先進地域へと発展している。

「生産部会のクリーン班から始まり、有利販売の機運が高まったことで、部会全体で取り組んでいます。慣行栽培より5~10%ほど収量は落ちますが、きちんとした土づくりや肥培管理によって高品質のものが収穫でき、秀品率が上がる。クリーン品目を求めるお客さんが多く、生産者のがんばりを評価してくれる。慣行の農産物の流れもよくなりましたね」

と、長年にわたって牽引役を務めてきた、JAとうや湖の遠藤靖彦クリーン農業推進課長が笑顔で話す。

## 雪蔵やGAPで信頼を得る

しっかり根づいたクリーン農業はいま、いっそう深まりを見せている。

「北海道洞爺湖サミット」が開催された一昨年、JAの野菜集出荷センターの一角に「雪蔵野菜貯蔵施設」(写真右)が完成した。集めた雪を2か所の倉庫に堆積し、雪氷熱を利用して摂氏2~4度の低温と湿度90%以上の環境を保ちながら、ジャガイモやゴボウなどを貯蔵する施設だ。

野菜の細胞は、温度が零度近くに下がるとデンプンを糖に変える機能がはたらき、ジャガイモなどの甘みが増す。さらに、解け出した水が雪蔵の湿度を一定に保つので、野菜の表面の乾燥を防ぐ。商用電力を軽減し、省エネと二酸化炭素の排出抑制にも役立つ。クリーン農



業とセットで野菜の付加価値を高めている。

農作業の各工程を記録・管理することで消費者や販売先に信頼してもらい、品質の向上や適正な販売をめざす「農場管理基準（GAP）」も実践する。

日本には生協やJAグループが定めた農場管理基準があるが、そのベースになっているのが「GLOBALGAP」と呼ばれる国際基準。JAとうや湖は昨年、青果物のグループ認証では国内初となる「GLOBALGAP」の認証を得た。生産部会から選任された15人で行く認証グループが根菜類やカボチャ、トマト、レタスなど11作物の農場管理に取り組んでいる。

「2年間かけて生産者に説明し、学習会や内部検討を経て取得しました。国際基準なので前提抜きに納得してもらえ、農産物の商談もスムーズに進みますね」

と、グループマネージャーを務める遠藤さん。書類作成などを担当し、生産農家の負担軽減を図ってきた。



とうや湖クリーン農業推進協議会会長の大廣功さん(59・写真左、トラクターに乗車)

は、15年ほど前から米糠や粕類を発酵させたボカシ肥料をつくり、ジャガイモやアズキ、レタスなどに施用する。

畜産農家から仕入れた堆肥や、ヘイオーツ(エンバクの野生種)などの緑肥の投入にも熱心だ。クリーン農業に取りくんで20数年になる。

「ここ3年ほどで緑肥を取り入れる農家が増えてきたんだ。若い人たちがUターンして、会合に顔を出すようになった。慣行栽培の農家のなかにも、『息子が帰ってきたら、手間がかかってもクリーン農業をやるよ』と話す人がいますよ」

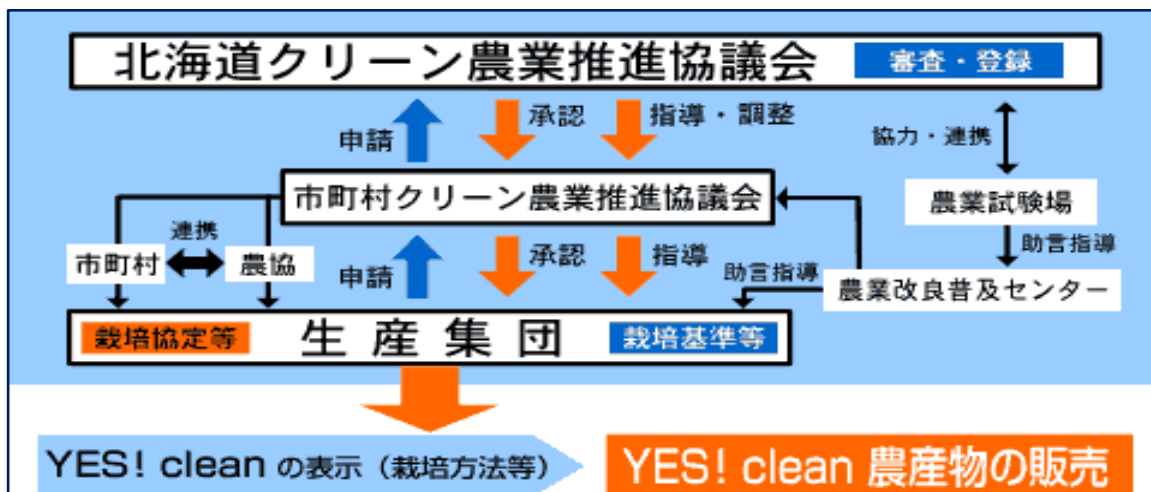
と語り、確かな手応えを感じていた。

自然環境を生かした多品目生産のクリーン農業によって、地域のブランド力を高める挑戦は新たな段階を迎えている。



## 北のクリーンの農産物表示制度ってなに？

「クリーン農業」とは、堆肥や緑肥などによる土づくりに努め、化学肥料や化学合成農薬の使用を最小限にとどめるなど、農業の自然循環維持・増進させ、環境との調和に配慮した農産物の生産を進める農業のこと。北海道が提唱し、平成3年度から実践を重ねてきた。北海道農業のスタンダードをめざし、農家や経済・流通・消費者団体、行政機関などで北海道クリーン農業推進協議会（事務局・JA北海道中央会農業企画課）が組織されている。



同協議会から「YES! clean 生産集団」の登録を受けたJAの生産部会や生産者グループなどが担い手となる。21年産の農産物は全道の延べ366団体が登録された。

登録集団は、農産物ごとに定める化学肥料や農薬の使用量の上限をはじめ、北のクリーン農産物表示要領で示す栽培に沿って生産流通する農産物に、「YES! clean マーク」を表示して、全国の消費者に詳しい栽培情報を知らせている。

●北海道クリーン農業推進協議会 [TEL:011-232-6411](tel:011-232-6411) <http://www.yesclean.jp/index.html>

